

事始め行事

——時曾根を歩く——

最近ほとんど耳にしくなくなった言葉に「事始め」、「事八日^{ことようか}」があります。2月8日をそう呼び、農業が主であった時代にはこの日に集落の行事や農作業を始める習わしがあったとされます。

時曾根区（豊栄地区）ではこの日、集落の入り口3カ所に稲わらで作った長さ3mほどの大蛇をつらし、無病息災や地域の安全、豊作などを祈る行事が行われます。



稲わらで作られた3匹の大蛇

この行事を初めて調査したのは50年以上前の昭和40年代半ばで、薄暗い会所であらにまみれながら一日がかりでこしらえた大蛇を薄暗くなった夕方、三方に分かれ、担いで行った様子が思ひ出されます。当時この行事に呼び名はなく、県内で行われていた同様の行事が「辻切り」、「道切り」などとされていました。時曾根区の年配者と話し「大蛇まつり」としました。

時曾根区の集落はおよそ400年前に成立したとされ、水田に囲まれているため集落への出入り道は限られ、村境に大蛇をつらし邪悪なものや疫病の侵入を防ぐ意味が込められ、道祖神と同じような目的があると考えられます。

稲わらを使った伝統行事は山桑区（匠瑳地区）稲荷神社の「綱かけ神事」（本紙令和3年2月号で紹介）もあります。五穀成就と書かれた木札をつらした大注連縄を鳥居前の大木にかける行事です。この行事も昭和40年代半ばに地区の人たちと相談し、「綱かけ神事」と呼ぶことにしました。

県内各地にわら蛇と綱つりの伝統行事が残っていますが、時代の移り変わりの中で、実施日を変更して参加しやすくなったものや、やむなく中止となり消滅した風習もあります。

巳年の今年も「大蛇まつり」が継続されると聞き、紹介しました。

（市文化財審議会委員・依知川雅一）

問 秘書課広報広聴班 ☎73・0080